

用法依存理論から見た小学校中学年に対する英語教育の可能性

菅井三実(兵庫教育大学 学校教育研究科 教授)

背景と目的

本研究は、英語の母語習得に関して具体的なプロセスを説明する「用法依存モデル(usage-based model)」を小学校英語教育に援用し、その妥当性と問題点を検討するものである。前年度の研究助成期間(2014年4月～2015年3月)において、用法依存モデルの観点から小学5年生の英語習得状況を調査し、用法依存モデルにおける全4段階のうち、第1段階から第3段階のレベルをクリアできることを確認した。小学5年生がクリアした3つの段階とは、一語文(生後12ヶ月相当)→軸語スキーマ(生後18ヶ月相当)→項目依拠構文(生後24ヶ月相当)の3つであった。今回の継続助成[短期]期間(2015年8月～2016年3月)では、平成32年度(2020年度)に小学3年生からの英語学習の必修化が予定されていることを見据え、小学3年生の英語習得状況を明らかにすることを目的とする。

方法と考察

前年度の研究助成期間において小学5年生を対象に第1段階から第3段階のレベルをクリアできることを示したので、継続助成期間では次の2つの観点から調査研究を行なった。

- [1] 前年度の調査において小学5年生が一語文(holophrase)を習得できたのと同様の要領で小学3年生も一語文を習得することができるか。
- [2] 小学3年生に対して、第1段階に先行する予備的な認知的能力の発達を促すことは可能か。

[1]は、前年度の小学5年生に対する調査と同様の方法で小学3年生を対象に第1段階のレベルをクリアできるかどうかを調査するものである。前年度の調査研究では音声レコーダーを用いたが、継続助成では、新たにメガネ型ビデオを購入し、児童に装着させたところ、音声と同時に児童の視線を動画データとして明瞭に記録することができ、これにより、一語文(Lemne-see など)の習得が確認できた。[2]に関して「第1段階に先行する予備的な認知的能力」というのは、英語母語幼児の月齢9ヶ月ごろに社会認知的スキルの変化が観察されることであり、用法依存モデルにおいて「9ヶ月革命」と呼ばれるものである。この「9ヶ月革命」に見られる認知的能力のうち、本研究では、「視線追従」と「三項関係的コミュニケーション」という2つを検証した。「視線追従」は、大人(指導者)と同じ対象に視線を向ける能力であり、母語環境では当然のように可能であるが、英語環境下でも可能かどうかを調査した。三項関係(triad)とは、幼児と大人という二項に、もう1つ「対象」という第三項が加わったもので、母語環境下では生後6か月以降に見られる。現実のコミュニケーションにおいて2人だけの二項的な対話は、実は極めて不自然であって、三項関係の成立は、現実のコミュニケーションを発達させるのに不可欠となる。本研究は、英語という外国語環境下において、三項関係に対応できるかどうかを調べるものであり、結果として、前述のメガネ型カメラにより、小学3年生は「視線追従」も「三項関係的コミュニケーション」も英語環境下で対応できることが確認できた。

今後の課題

本研究では、小学3年生を対象とする調査研究によって、用法依存モデルでいう第1段階(一語文)に対応できるだけでなく、その前提となる「視線追従」や「三項関係的コミュニケーション」にも対応できることが動画の解析から分かった。「視線追従」や「三項関係的コミュニケーション」が母語環境下で出来ることは当然であるが、英語環境でも対応できるということは、英語学習という環境下においても教員やALTの動きや視線を追えるということであり、小学校3～4年生に対する英語教育の導入にとって肯定的な証左が得られた。特に「三項関係的コミュニケーション」は、英語学習の中で重点的に発展させなければ自然な英語コミュニケーションは上達しないことから、そのための汎用性の高い指導方法の確立が今後の課題となる。